[書評]

陳天璽、大西広之、小森宏美、佐々木てる編著『パスポート学』*

薮野 祐三

パスポートを研究対象にした書物は、日本の研究者が執筆したものとしては管見の限り本書が初めてではないか。それだけに、内容も豊富で、読み進むほどに興味がわく。そこで、まず本書の構成について紹介し、その後に、わたしの評論を加えたい。

全体は注記や参考文献などを除いた本文だけで260ページに及ぶ。他方、執筆者は36名にも及ぶ。単純に計算しても、ひとり10ページの分担で執筆されている。この執筆者の多さは、「ポジ」と「ネガ」の両面がある。「ポジ」の面としては、パスポートの概要を網羅している点にあるが、「ネガ」としては、内容があまりにも広範囲に及ぶため、「果たして、パスポートとは何か」という根本的な疑問を投げかける。

このような本書の特徴を前提として、まずは全体の構成を見ていこう。本書は二部構成になっており、第１部は「パスポートを視る」、第２部は「パスポートを考える」に分けられている。第１部は各種パスポートの事実的な紹介であり、第２部はその意味を考える部分に充てられている。

では、第１部の章構成を見ていこう。

第１章　世界のパスポート

第２章　日本のパスポート

第３章　移動と身分証明書

第１部は、このような三章構成からなっている。ここでは、世界のパスポートの大きさや書式など、パスポート原本からの画像を駆使して、その多様性を分析している。パスポート本来の姿を知るには、その力の入った記述から、きわめて有益な情報を得ることができる。

中でも、やはり日本でのパスポートの実態はどうだったのかということがまず気になる。これが読者の一番関心の高い部分だろう。本書では、第２章で日本のパスポートに焦点を絞って分析が加えられている。興味のあり方によって読み方も異なるが、第２章から読み始めてもよい。日本でのパスポートの実態を知ってから、世界のパスポートについて

* 陳天璽、大西広之、小森宏美、佐々木てる編著『パスポート学』北海道大学出版会、2016年。

DOI : 10.14943/jbr.7.97

の第１章に戻る読み方のほうが、興味が深まるのではないか。当然、世界のパスポートについての章だから、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカ、中近東、アジアと、世界の各地域のパスポートが紹介されている。

一つ苦言を呈すならば、ヨーロッパだけでも、パスポートの多様性を理解するにはなかなかの力が必要なわけだが、それがヨーロッパを超えて、アメリカ(アメリカ合衆国だけではなく、アメリカ大陸という意味でのアメリカ)、アフリカ、中近東、アジアにまで及んでくると、やはり何等かの基準を設けて、一枚の図表でそれぞれのパスポートの相違が、ある程度簡単に理解できる工夫が欲しい。そのため、第１章の内容は、パスポートの陳列棚のようなイメージで捉えられてしまいかねない。

第３章では、身分証明書として利用されているパスポートについて、つまり、旅券としてではなくIDカードとしての機能について分析が加えられている。本章の記述で問題なのは、身分証明書が旅券としてのパスポートに拡大するのか、旅券としてのパスポートが身分証明書に拡大するのか、時と場合によりけりなので、ここでも、旅券としてのパスポートの意味と身分証明書の意味の転換を図式化して整理して欲しい。読者としては、次から次へと情報だけが流れてくるので、やや読みづらいきらいがある。

では、第２部の紹介に移ろう。第１部がパスポートの「紹介編」だとすれば、第２部はパスポートの「利権編」となっている。

第４章　パスポートの概念・理論

第５章　パスポートをめぐる政治

第６章　人とパスポートの関係

第２部はこのような三つの章から構成されている。やや時事分析的になってしまうが、アメリカ合衆国大統領のドナルド・トランプが、大統領令でイスラーム諸国からの入国を拒否した例に見られるように、パスポートの発行、使用範囲、有効性などは、時代により、政治により大きく制限もされ、逆に拡大もされる。さらに言えば、パスポートの発券さえ制限される場合がある。多民族国家などでは、民族間の紛争が発生している時など、パスポートは出自の民族を証明する機能を果たしている。そのような意味で、第２部は「パスポートと政治」と題するほうが理解しやすい。

第２部についての論評にやや困難を感じたのは、パスポートにまつわる政治が事例ごとに語られてはいるものの、感想としてはひとしきりの個別情報を得る程度で終わってしまうという点である。第２部の内容を理解するためには、第１部について理解する以上に力と予備知識とが必要とされる。それに鑑みれば、パスポート発行、通用、制限といった事項について、問題点を整理し、個別に議論を展開して、さらに、問題点をまとめた整理図があれば、読者の理解度はより深まっただろう。

本書は、第１部と第２部を通じて、パスポートに焦点を当ててこれだけの具体的な事例

を研究した書物は希有に近い。だからこそ、問題点を整理した図表が欲しかった。本書の読者は、その図表によって、本文の内容をよりよく理解する上で、一定の予備知識を得ることができたはずである。

次に、評者の私見を加えて、本書を評価したい。本書の最大の問題は、「パスポート学」としながら、その思想的・歴史的意義がほとんど論じられていない点にある。つまり、「パスポート」という言葉にこだわっていない点が、本書についての最大の疑問点なのである。通常、海路交通、陸路交通、身分証明書の三つの分野に、パスポートがもつ「人間と証明書」の関係は分類できるだろう。パスポートが身分証明書に使われる場合もあれば、その逆の場合もある。パスポートは、恐らくは「パス(通過)」と「ポート(港)」から成り立っている言葉だと考えられる。この語は、元々は港の通交証明書を意味したに違いない。

言葉こそが学問の命だと思うのだが、本書では語の原義とそれがもつ歴史的意味合いについて扱っていない。よって、本書は「通行証明書」、「身分証明書」に関する研究以外の何物でもない。よって、本来ならば、本書のタイトルは『「通行証明書」と「身分証明書」の歴史』と書き改める必要があるだろう。

評者自身、パスポートの起源について以前から疑問に思っていたので、日本の外務省に調べてもらったことがある。しかし、それは当然ながら、旅券の歴史に過ぎなかった。本来、言葉にこだわるのであれば、「パス＋ポート」である以上、海路交通の通行証として「パスポート」は発生したと考えられるのではなかろうか。

陸路交通については、評者はトルコで調査をしたことがある。それは、シルクロードと通行証の関係だ。現地で得た情報は、キャラバンがトルコ領内に入る際に、通行証を購入する必要があった。これは、一種の通行税である。その通行証を持っていると、約30キロごとに設けられた、政府公認のキャラバンサライに宿泊できる。宿営地は、完全に保安体制がしかれ、キャラバンの積荷の目録とサライの責任者が確認しあい、目録からひと品でも紛失があれば、サライ側の責任として、金額が保障された。この歴史は、シルクロードとともに古い。もし、通行証を買わずに旅すれば、キャラバンサライに宿泊できない。通行税を払わなくて済むが、野営を強いられる。野営の場合、強盗集団に遭遇するリスクはきわめて高い。税と安全の関係だ。しかし、この通行証は「パスポート」とは呼ばれておらず、文字通りの「通行証」である。少なくとも、トルコでは陸路での通交に対して「パスポート」という語を用いてこなかったという点に、一つの「パスポート」の歴史的・思想的背景のヒントがあると評者は考えている。

本書は、海路交通、陸路交通、身分証明書という三の機能を一括りにして、パスポートと呼んでいる。さらに、現代ではエアーポート(空路)も「ポート(港)」という用語を使う。「ポート」の意味は深く、重く、長い。本書は、「パスポート学」を銘打つならば、その背景にある過去の海路での通交を踏まえた上での、「パスポート」の思想と歴史に、もっと突っ

込んで欲しい。現代的な「パスポート」は、海路交通、陸路交通、身分証明書を包括した広義の意味がある。これに対し、あくまで評者の仮説が正しければという留保はあるが、語の原義に近い、海路に限定された「パスポート」の意味もあるだろう。本書で扱っているのは、あくまで広義のパスポート概念である。

確かに、フランス革命期に人の移動を制限したことが現代的なパスポートの発祥だということは、本書でも述べられている。しかし、フランス革命期における人の移動は陸路であって、海路ではない。さらに言えば、パスポートは本人確認が必要だとするという記述もあるが、仮に「パスポート」が大航海時代に港の寄港証明書のような起源を有するとするならば、本人確認ではなく、国王やしかるべき人のサインなどを必要とした可能性もある。

今日の日本では、銀行などで本人確認をするためにパスポートを持参する人は、極めて稀である。確かに、提示すべき身分証明書の中には、「パスポートも可」とはある。しかし、今日の日本のパスポートが渡航証明を一義的な目的としている以上、通常、我々が持ち歩くことはない。

結論づけて言えば、各論としての、広義のパスポート学としては、本書は良書といってよいだろう。しかし、タイトルがあくまでも『身分証明書の歴史』となっていない以上、(評者の仮説によるところの)海路通交を前提とした、「パス＋ポート」の「パスポート」学が欲しい。それは、歴史と思想に立脚すべきものである。